

JCCI SINGAPORE FOUNDATION RETURNED SCHOLARS STUDY REPORT

2023年秋の学期、JCCI基金奨学金を授与された3名の学生が早稲田大学国及び国際基督教大学（ICU）へ1年間のコースを勉強しに行きました。今年の6・7月に修了し、シンガポールに帰国しました。学生たちは会員の皆様に感謝のお気持ちを込めてスタディーレポートを紹介したいとのことです。



(左:早稲田大学留学生アミリアさん、イライザさん 及びICU留学生セフィーさん)

Ms. Lim Siew Ping (Eliza)

早稲田大学 国際教養学部 留学生
(September 2023- July 2024)

“JCCIの皆様、いつもお世話になっております。私が日本語でのコミュニケーションについて書くことを選んだ理由は、もともと語学学習に興味があり、特に日本語はその美しさに惹かれて最初に学びたいと思った言語だったからです。一年間日本で生活する中で、これまで考えたことのなかった日本語のさまざまな側面や、社会や文化が言語に与える影響に気づきました。この一年がなければ、日本語についてここまで深く掘り下げることはできなかったと思います。この貴重な機会をいただき、日本語の美しさを発見できたことに心から感謝しております。もしご興味がありましたら、ぜひ私のレポートをご覧ください。”

「日本の挨拶と表現：文化の違いとその魅力」

日本人の挨拶や表現には、他の文化圏では見られない独特な特徴があると思う。日本の大学で学び、現地の日本人家庭と過ごす中で、いくつかのコミュ

ニケーションの側面が非常に興味深いと感じた。外国人が日本語を学ぶとき、特に海外で学ぶ場合、実際の日本人の話し方をあまり知らないことが多い。異なる文化環境で日本語を学ぶため、自分の文化で普通だと思える言葉を日本に来て日本人に使ってしまうことがある。しかし、日本で特に大学生の間では、自分の文化では奇妙に感じるような挨拶がよく使われることに気づいた。このような日本人のコミュニケーションの一面を皆さんと共有したいと思う。

具体的には、「お疲れ様」や「おはようございます」といった挨拶がその例である。また、多くの文脈で使われる曖昧な表現、例えば「大丈夫です」についても紹介したい。これらの表現は、非日本語話者にとって最初は奇妙に感じるかもしれないが、日本人にとっては日常的なコミュニケーションの一部である。また、日本語には特定の感情表現、例えば「I miss you」といった表現が存在しないことも興味深い。このような表現の使い方や背景を探ることで、より深く日本のコミュニケーション文化を理解できるであろう。

本稿では、これらの挨拶や曖昧な表現、そして存在しない感情表現について詳しく説明し、ハイコンテキスト社会とローコンテキスト社会の違いにも触れながら、その背景にある文化的な要素を考察していく。

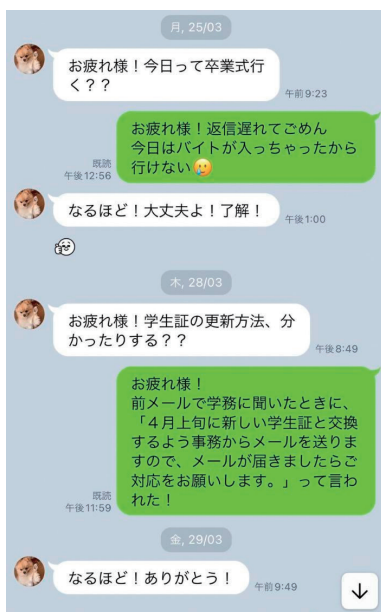
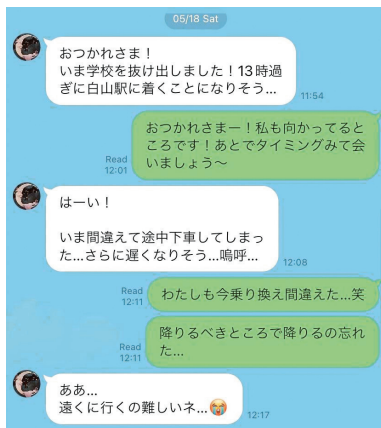
「おはようございます」と「お疲れ様です」の使い方

なぜこの二つのフレーズ「おはようございます」と「お疲れ様です」について特に説明することにしたかというと、これらのフレーズの使い方がとても興味深いからである。日本語を学び始めた時、教科書から「おはようございます」と「お疲れ様です」の使い方を勉強した。しかし、実際に日本に来て日常生活の中でこれらのフレーズを使うと、教科書通りだけでなく使い方やニュアンスの違いに気づいた。

例えば、「おはようございます」は朝の挨拶として最も一般的に使われるが、夜でも仕事やアルバイトの始まりを示す際に使われることがある。これは、「おはようございます」が「新しい始まり」を意味するためである。特に飲食店などのアルバイトに出勤した時に、この挨拶が使用される。この表現は芸能界や飲食店では何十年も前から何時でも使われており、ほとんどの日本人は知っていることである。しかし、外国人にとって、特に私にとっては、“Good morning”は朝だけに使うものという概念があるため、

この使い方は非常に新鮮であった。

一方、「お疲れ様です」は、仕事の終わりや別れの挨拶として使われることが多いが、友達同士での偶然の出会いや初対面の挨拶としても使われる。このフレーズは、相手の努力を認める意味を持ち、相手をねぎらうニュアンスが含まれている。私が日本で経験したことから言うと、「お疲れ様です」は一般的な会話の中で学生が自然に使っていることがわかった。例えば、大学院生や大学生が昼ご飯を食べている時や、飲食店のアルバイトに出勤した時にもこの挨拶が使われているのを見た。このような挨拶は日常のメッセージでも使用される。以下は日本の学生が挨拶をどのように使用するかの例である。



ここで強調したいのは、特に「お疲れ様です」の使い方についてである。私の周りの日本人の友人たちは自然に使っており、私も自然に使うようになったが、これは学生の間で拡大している使い方であり、必ずしも全ての日本人がこのように使っているわけではない。また、この表現は友人同士で使われるものであり、年上の人に対して使うことはできないという点も重要である。

このように、「おはようございます」と「お疲れ様です」の使い方は教科書通りではなく、実際の生活の中で広がりを見せていることに気づいた。このこ

とを通じて、日本語の挨拶の奥深さとその多様な使い方を理解することの重要性を感じたのである。

日本語に存在しない感情表現

次は、日本語には特定の感情表現の直接的な翻訳がない理由について説明したいと思う。この疑問を持った理由は、日本語を使っているときに自分の気持ちを正確に表現できないと感ずることがあるからである。例えば、「I miss you」というフレーズである。私は英語と中国語を話せるが、これらの言語には「I miss you」を表現する方法がある。英語では「I miss you」、中国語では「我想你」と言う。しかし、日本語にはこれに相当する表現がない。「I miss you」を日本語に訳すと、「会いたい」や「寂しい」になるが、これらは完全に同じ意味ではない。「会いたい」は単に誰かに会いたいという願望を表現するが、「I miss you」が持つ感情の深さや寂しさ、恋しさをすべて伝えるわけではない。また、「寂しい」は一般的に孤独や寂しさを表現する言葉であるが、特定の人に対する感情を直接的に示すわけではない。

このように、特定の感情を正確に表現できないことから、なぜ日本語には特定の感情表現の直接的翻訳がないのかという疑問が生まれた。この疑問を解決するために、日本語における感情表現が少ない理由を調べ始めた。そして、藤本久司氏の「文化の類型とコミュニケーションギャップ」という論文に出会った。この論文では、日本社会の構造、特にどのようなコミュニケーションが社会で行われているかについて説明している。

まず、日本はハイコンテクスト社会であり、非言語的なサインや文脈を重視するため、感情表現が少なくなる。このような社会では、人々はお互いに合わせる傾向があり、その結果、感情を直接表現しないことが社会的な価値観となる。例えば、日本では感謝の気持ちを伝える際にお辞儀をすることがとても重要である。お辞儀の程度はより高いレベルの敬意を意味する。また、配慮や遠慮が求められるため、感情を表に出さないことが一般的である。

つまり、ハイコンテクスト社会では、状況や文脈から相手の意図や感情を読み取ることが重要である。これは文章の中で「察し」や「行間を読む」といった表現にも表れている。感情を直接言葉にするよりも、非言語的なサインや態度で示すことが一般的である。例えば、日本では「I miss you」というフレーズが存在しないのは、言葉で感情を表現するよりも、相手の気持ちを察することが重視されるからである。

以上のように、日本語に特定の感情表現の直接的翻訳がない理由は、日本がハイコンテクストの文化であり、非言語的なサインや文脈を重視するためである。この理解は、私が日本人とコミュニケーションを取る際に、文化的背景やコミュニケーションスタイルをより深く理解するのに役立つ。

曖昧な表現

最後は、「大丈夫です」の様々な場面での使い方についてさらに詳しく説明したい。この表現は、日本のハイコンテクスト社会の特徴を反映しており、肯定的な返答としての意味だけでなく、否定的な含意を持つことがある。一例として、レジで「レジ袋はどうされますか？」と尋ねられた際、私はいつも「大丈夫です」と答えることが多い。この場合、「大丈夫です」は「いりません」という意味を含んでおり、相手に迷惑をかけたり、余計な手間をかけたりしないようにする配慮の表れとなる。

また、服を購入する際に店員が「服はいかがですか？」と聞いてきて、気に入らない場合でも「大丈夫です」と答えることがある。これも同様に、ハイコンテクストの文化が背景にある表現である。日本では、感情や意思を直接的に表現することが避けられる傾向があるからである。このため、「大丈夫です」という表現は、断りや拒否を柔らかく伝える手段としても機能する。

一方で、「大丈夫です」は肯定的な意味でも使われる。例えば、友達が体調を心配して「具合はどうですか？」と聞いた時に、「大丈夫です」と答えると、「問題ありません」という肯定的な意味を持つ。このように、「大丈夫です」は状況によって肯定的な返答としても使われる。

さらに、「大丈夫です」という表現は、英語の「okay」とは異なり、微妙なニュアンスの違いがある。日本の家族と暮らしている場面で、お母さんが「お茶いる？」と尋ねると、頭の中で「OK!」と思いつつ、「大丈夫」と答えることで、お母さんはそれが必要ないと受け取ってしまう。「大丈夫です」は、ハイコンテクストの文化が求める非言語的なサインや、相手の気持ちを察する能力に根ざしていると言える。



お母さんと私の写真

つまり、「大丈夫です」という表現は、肯定的な意味と否定的な含意を同時に持つことで、日本のハイコンテクスト社会が抱えるコミュニケーションの複雑さを示している。この文化的背景を理解すること

で、言葉の表面だけではなく、その裏にある意図や文脈を理解し、より円滑なコミュニケーションを図ることができるであろう。

また、他の JCCI 奨学生との集まりの際にこのような会話をし、協力してくれた大地さんに感謝したいと思う。



まとめ

結論として、コミュニケーションは文化の柔軟で適応的な側面であることを深く理解することが重要である。例えば、「お疲れ様」と「おはようございます」の使用に関しては、私の周りの日本人の友人たちが頻繁に使用しているが、これが公式な表現の使用方法ではないことを認識し、適切に使い分ける必要があることが理解されるべきである。また、曖昧な表現については、経験と文脈を通じて自然に使い方を学ぶことができると考える。これは、先述のハイコンテクスト社会とローコンテクスト社会の概念とも密接に関連している。日本文化は直接的に物を言わず、文脈や非言語コミュニケーションに大きく依存しているため、日本語の学習に加えて文化的な背景の理解が重要であり、その学びと成長の機会を得られたことに感謝している。

下の写真は、東京、大阪、福岡で日本人の友人たちと過ごした時間を写したものである。友達の会話を聞いていると、大学生がどのように自然に会話しているのかがよくわかってきた。



九州大学の友達を訪ねたとき



大阪大学の友達を訪ねたとき



早稲田の友達とお花見してたとき

【参考文献】

藤本, 久司. 「文化の類型とコミュニケーションギャップ」『人文論叢』, 第28巻, 三重大学人文学部, 2011年, pp. 145-155

Ms. Sim Ying Zhi Amelia

早稲田大学 国際教養学部 留学生
(September 2023- July 2024)

“JCCIの皆様、いつもお世話になっております。2023年に早稲田大学へ留学させていただいたアミリア・シムと申します。今回、私はひな人形の歴史的発展と、それが日本社会に与えてきた影響についてレポートを書くことにいたしました。日本滞在中、歴史専攻の学生として、このテーマに深く魅了されました。ひな人形が時代や地域によってどのように変化してきたかを通して、その変遷が日本の各時代や地域における社会的信念、伝統、そして価値観の変化をどのように反映しているのかを考察していきたいと思っています。本研究を通じて、ひな人形やひな祭り、ひいては日本文化への理解と愛着がより深まることを心より願っております。この美しい文化をより多くの人々に知っていただくため、レポートは英語で執筆することになりました。”

Historical Development of Hina Dolls in Japan

Introduction

What exactly are Hina dolls (雛人形) in Hinamatsuri (雛祭り)? As a foreigner, my first exposure to Hina dolls was in a traditional teahouse, where a pair of exquisite Hina dolls were displayed amidst the traditional backdrop of the room. It was only during my travels around Tokyo, particularly from a visit to the Hyakudan Hina Matsuri exhibition at Hotel Gajoen Tokyo's Hyakudan Kaidan 「百段階段」 that I came to appreciate that beyond their aesthetic appeal, these dolls (often displayed as a husband and wife pair) embody a rich and complex history spanning centuries. Titled “1,000 Years of Hina Dolls: Wishful Thoughts Passed Down from the Heian



The stunning display of Zashikibina Dolls observed at Hyakudan Kaidan. It depicts the scene of Kyoto during the Heian period (794–1192). Source: 1,000 Years of Hina Dolls website (left) and myself (right).

Period to the Present Day” 「千年雛めぐり：平安から現代へ受け継ぐ想い」 the exhibition piqued a deep interest in understanding the complexities behind the seemingly unassuming object of dolls. This imbued me to write my JCCI Study Report on Hina dolls found in Hinamatsuri, specifically regarding their historical development in relation to the greater Japanese society. Through how they evolved over time and geographical space, I would like to further explore how such an evolution of Hina dolls reflects the changing societal beliefs, traditions and values in different periods and regions of Japan. It is with the hope that through this study, a deeper appreciation of Hina dolls, Hinamatsuri and Japanese culture can be fostered.

Historical Background of Hinamatsuri (雛祭り)

Hinamatsuri, also known as Girl's Day or Doll's Day, is a cultural holiday with Shinto origins. Observed on May 3rd of each year to celebrate and pray for the health and happiness of young daughters in Japanese households. During this period, elaborately crafted Hina dolls will be put on display in Japanese households with young girls. While competing legends of the origins of the festival are present, it is generally believed that it began during the Edo period (1603-1868). During this time, the Tokugawa Shogunate aimed to establish new systems for the samurai class. One of which was the creation of seasonal festivals following the lunar calendar, known as the Five Seasonal Festivals (五節句) (弥栄女, p.2). Hinamatsuri was thus dictated to be the second of the five festivals, synonymous with the Peach Blossom Festival (桃の節句) as it was the period where peaches typically blossomed. During this time, rice cakes and peach blossom wine were also given as offerings to ward off evil spirits. Correspondingly, the 5th of March was dictated to the third festival, known as Boy's Day (端午の節句) and synonymous with the Iris Festival for a similar reason—the use of irises to keep boys from illnesses and bad spirits (McGowan). The need for purification is a central theme of such festivals. The changing seasons, marked by these festivals, are also periods where people were most vulnerable to sicknesses due to temperature changes. This makes the concept of warding off bad energy all the more pertinent during the festival period.

Origins of Hina Dolls

Understood in this light, how then do the dolls come to prominence in Hinamatsuri? We must first begin by understanding the origins of Hina dolls, and their context in relation to the concept of purification. While Hinamatsuri can be traced to the Edo period, the creation of Hina dolls began much earlier. The origins of Hina dolls date back to the Heian period (794-1185). During this period, the earliest iterations of Hina dolls were often

made simply of scrap fabric by family members in the aristocratic class. They would be given to young children of the family as a charm to ward off any sickness or bad fortune to the doll (“Hinamatsuri: Japan's Doll Festival”, 2015). Traditionally, the young girl will stroke the Hina doll to rid herself of any bad luck or evil spirit, and the doll will be released into a flowing river with the hope of carrying misfortune away (雛流し) (Yen, 1975, p.53). Such a ritual reflects the idea for girls to rid themselves of any “impurities”. This alludes to the cultural perception of the female body during the period as inherently impure, and the necessity of a ritual to rid herself of it to strive for an ideal of purity.

The introduction of Hina dolls into the Hinamatsuri can thus be seen as a continuation and formalisation of these earlier purification practices. Just as the seasonal festivals marked vulnerable periods requiring necessary rituals to protect and purify individuals, the use of Hina dolls during the Hinamatsuri reflects a similar desire for protection. Additionally, the third day of the third month, deemed as auspicious in Ancient Chinese thought, coincides with the date set for ancient purification rituals described in classic Japanese literature “The Tale of Genji” (McGowan). It is said that on that day, the ritual of “harae” (祓) was performed to cleanse impurities (“Hina matsuri”). The dolls, once part of a practical purification rite, became central to a communal celebration that embodied both the joy of spring and encompassing wishes of good health and luck for daughters of the family. By aligning the festival with the broader cultural context of seasonal change and the inherent need for purification, Hinamatsuri encapsulates a convergence of the ancient with the evolving, bringing together societal rituals into a celebration of purity and well-being.



"The Tale of Genji" Chapter 12. Naraehon manuscript, mid-17th century. Source: British Library.

Evolution of Hina Dolls: From a tool for cleansing impurities to a family's prized possession

During the Heian period, Japan further saw a growth in aristocratic and court culture (Heinrich). As such, dolls began taking on a new evolving role, popularised as playthings for children from the noble class (雛遊び).

Following this, Hina dolls also became more accessible to common folk during the Muromachi era (1336–1573). In the Edo period (1603–1868), the custom of presenting Hina dolls during Hinamatsuri was popularised, particularly among the merchant class. The dolls



The image on the left showcases a Hina doll, otogi-bouko which children played during the Heian period. It is made from fine silk and resembles a crawling child. Source: NDL Image Bank.



The image on the left depicts a tachibina doll couple, with clothing styles of the Muromachi era. The tachibina dolls (standing dolls) are one of the earliest iterations. They are often made of wood or paper, wrapped in textiles. Their simple forms resemble that of their origins as hina-nagashi (dolls that are floated down the river). Source: 毎日新聞.



The image on the left depicts the Muromachi-bina dolls, which are in a sitting position. The sitting position is common in present-day Hina dolls. The male Hina doll is adorned in Noshi, the dressing of noble men together with Hakama. The female Hina doll is wearing a red Hakama. Source: Kyugetsu.

additionally evolved with increased intricacy and quality for they were subsequently made by master dollmakers. Resultantly, as the dolls became more detailed and extravagant, families were more reluctant to release the dolls in the river every year (Yen, 1975, p.53). Instead, they would prominently exhibit their dolls in their households, coupled with a well-decorated tiered platform in red (Yen, 1975, p.53). The dolls expanded to include the emperor and empress (内裏雛な人形), as well as imperial palace members (御所人形). They are commonly placed on a five-step platform with the emperor and empress at the top, a reflection of the social hierarchy of the Edo era. Other dolls created include the husband and wife dolls created inspired by the Muromachi era in the 1400s, and the musician dolls in the mid-1700s (Yen, 1975, p.54). As such, as the dolls developed in sophistication, it transformed into prized possessions for the family, where women would pass on their Hina dolls to the next generation of girls. However, despite the cultural shift in customs from releasing the Hina dolls down the river to displaying them prominently in Japanese households, the meaning attached to the dolls of absorbing bad luck in hopes of good health and happiness for daughters remains an enduring theme.

Evolution of Hina dolls: Reflection of society

Throughout history, the Hina dolls further evolved in relation to the economic prosperity of the society as well as the beauty standards of the period. For instance, during the increasing popularity of Hina dolls in the middle of the Edo period, doll markets were established and frequented by the people. During the period of Kyoho reforms (1716–36), a new type of dolls, known as the Kyoho bina dolls were created.



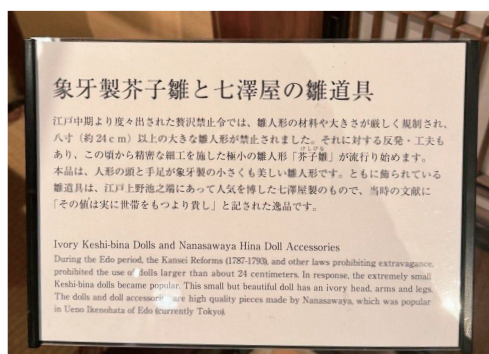
Kyoho bina dolls. Source: Kyugetsu.

The Kyoho bina dolls typically had long faces, slanted eyes, luxurious garments fashioned with gold brocade (ひな人形の變遷). Such elaborate dressing reflects speculations of the then emperor and empress' dressing. These dolls were often banned by the then government amid the country's economic and cultural reforms aimed at frugality.



Jirozaemon bina dolls. Source: Theriaults.

During the late 18th century, Jirozaemon bina dolls emerged. These dolls were named after a doll maker from Kyoto. They were popularised after Jirozaemon had opened his store in Nihonbashimuromachi (ひな人形の変遷). For Jirozaemon dolls, their faces are typically rounder, with thinner eyes and hooked noses (あれもこれも雛人形). The dolls exude dignity and elegance, shifting from the extravagance of Kyoho bina dolls. The garments worn, together with the facial features of Jirozaemon bina dolls are inspired by the dressing and beauty standards of the Heian period. This shift in opulence further reflects the relatively modest court dressing of the period (ひな人形の変遷). The changing facial features further highlight the changing standards of beauty through time.



Keshi-bina dolls. Source: Personal photos taken at 1,000 Years of Hina Dolls exhibition 2023.

The transformation of Hina dolls as a reflection of changing social norms is also evident in the popularization of Keshi-bina dolls amid the period of Kansei Reforms (1787–93). During this time, extravagance was discouraged, and the rising extravagance of traditional Hina dolls was restrained by the ruling shogunate. Consequently, smaller-sized Hina dolls emerged. These compact dolls, known as Keshi-bina, gained popularity, especially in densely populated cities where homes and living spaces were more limited (1,000 Years of Hina Dolls exhibition).

Arrangement of Hina dolls

Hina dolls will be typically arranged on a red-tiered platform. While the dolls can be displayed in a variety of ways, together with different types of decorations and furnishings, some aspects in accordance with the social hierarchy of the Edo period are retained. The display typically depicts the imperial couple and imperial palace attendants. The top tier would display the emperor and empress. For the Kansai region, the empress would be placed to the right of the emperor. In the Kanto region, the opposite would be done (Voyapon). A possible explanation would be the latter's adoption of more modern customs and traditions following the Meiji period where Western elements were introduced in society. In Western culture, left from a viewer's perspective is considered the superior position, leading the emperor to be placed accordingly as such. On the other hand, the Kansai region follows a more traditional Japanese viewpoint, where the right side was the customary placement for key ceremonial figures. The imperial couple would also be placed in front of a folding screen (屏風), accompanied by lampstands (雪洞) with pink decorations of ume and cherry blossoms to symbolise the welcoming of spring (Hina Matsuri (The Doll's Festival)). Below the emperor and empress, the second tier sits the san-nin kanjo (三人官女), known as the three court ladies. They would typically be holding sake and seasonal sweets. The subsequent platforms would display go-nin bayashi (五人囃子), also known as the five musicians. They would be depicted holding traditional musical instruments such as the drums (taiko 太鼓, otsuzumi 大鼓, kotsuzumi 小鼓) and flute (笛), or singing while holding a Japanese folding fan, sensu (扇子) (Hina Matsuri (The Doll's Festival)). Samurai and ministers, typically members of the imperial palace who take on a protector role would also be featured in the subsequent tiers (Voyapon). Japanese garden trees, such as cherry blossoms or peach trees will also be placed as decorative pieces on the tiers.

It is customary for the Hina dolls to be put on display from the beginning of spring until the day of the Hinamatsuri. It is believed that should the dolls not be kept away



A display of the tiered platform I saw at the exhibition.

promptly; the owners will have the misfortune of marrying late (Voyapon).

Regional variations of Hina dolls

Beyond the changes of Hina dolls through time, the decorations, displays and surrounding customs also differ across Japan's regions. Each area has its own distinct accompanying decorations that boasts local aesthetics, ornaments and customs of the region.

For instance, in the Tohoku region of Sakata, Hina dolls will be displayed alongside ornaments of festive local delicacies such as seabream (1,000 Years of Hina Dolls).

In Yanagawa, Fukuoka, hanging decorations known as tsurushi-kazari will be displayed alongside the Hina dolls. Tsurushi-kazari ornaments are made from scrap kimono and clothes, originating from fishing villages in the region amongst families who were unable to afford purchasing Hina dolls. Subsequently when the dolls became more accessible, the practice of making tsurushi-kazari continued, and the ornaments were displayed alongside the Hina dolls.

These regional distinctions highlight the rich diversity of Japan's cultural landscape, with each variation



Tohoku ornaments are displayed alongside Hina dolls. Source: Personal photograph taken in the 1,000 Years of Hina Dolls exhibition.



The image on the right shows tsurushi-kazari decorations hanging alongside Hina doll display. Source: 1,000 Years of Hina Dolls website.

showcasing a localised adaptation of the tradition. These distinctions not only preserve local heritage but further enrich the celebration of Hinamatsuri, showcasing how the ever-evolving Hina dolls while maintaining aspects that honour its historical roots.

Cultural significance of Hina dolls

Hence, the cultural and historical significance of Hina dolls in Japanese history stretches far and wide. Their change and continuity from tools of ritual purification to prized family possessions also reflect broader societal transformations in Japan. From their origins in the Heian period, where they were used to ward off impurities, to their later role as symbols of status and extravagance during the Edo period till the present, Hina dolls encapsulate Japan's shifting social values, beauty standards, and economic conditions. In particular, Hina dolls are material representations of central societal values of Japanese society, such as femininity, domesticity and protection. The evolution of Hina dolls, with their increasingly elaborate garments and shifting

facial features, reflects the changing societal ideals of what is regarded as the “feminine ideal” over time. The superstition that Hina dolls must be promptly put away after Hinamatsuri to avoid the misfortune of marrying late further underscores societal expectations of the ideal Japanese woman—to be domestically skilled and begin her family early. This reinforces societal norms and values concerning gender and family amongst generations of Japanese women.

Moreover, the regional variations in Hina doll displays further emphasize the dolls’ role as a cultural mirror. These local adaptations from region to region highlight how different communities in Japan have preserved and adapted the tradition of Hinamatsuri to reflect their own customs and resources. This resulting diversity produced enriches Japanese culture. By understanding the meanings, nuances and motivations for such developments of Hina dolls, one can begin to uncover the rich and meaningful history of Japan and its society through time and space.

Conclusion: Hina dolls at present

As globalisation beckons waves of foreign influences and culture within Japanese society, the culture of Hinamatsuri and Hina dolls has also moved to become more accessible for non-Japanese to get a glimpse into its rich and multifaceted history. For instance, the creation of the “1,000 Years of Hina dolls: Wishful Thoughts Passed Down from the Heian Period to the Present Day” exhibition was curated for both the Japanese and international eye. Personally, it allowed me a window to glimpse into Japan’s traditional culture and craft and understand it in the larger context of society through time. Hina dolls have also taken on roles as cultural artefacts, educating many beyond the four walls of a Japanese household. These opportunities not only serve as hallmarks in preserving the thousand-year-long culture of Hinamatsuri, but further create a cultural bridge for people around the world to appreciate Japan’s beautiful cultures and traditions. It is with this hope that this Study Report wishes to emulate the intricacy and rich history of the Hina dolls and celebrate its continued relevance and adaption throughout history.

【References】

- Heinrich, Amy Vladeck. JAPAN—Timeline of Historical Periods. 2020, afe.easia.columbia.edu/timelines/japan_timeline.htm.
 “Hina matsuri: Japanese traditions.” Shizuka, 2 Mar. 2018, shizuka.com.au/hina-matsuri-japanese-traditions.
 “Hina Matsuri (The Doll’s Festival).” Zooming Japan, 9 Apr. 2018, zoomingjapan.com/culture/hina-matsuri.

McGowan, Tara. “Doll Festival (Girls’ Day).” Japan Society, aboutjapan.japansociety.org/doll-festival#sthash.ZNoxkGXp.qM8LtGYa.dpbs.

Voyapon. “Hina Matsuri: A Day of Celebration for Girls.” VOYAPON, 2 Mar. 2020, voyapon.com/hinamatsuri-day-girl.

“あれもこれも雛人形.” NDL Image Bank, ndlsearch.ndl.go.jp/en/imagebank/column/hinaningyo. Accessed 10 Sept. 2024.

“ひな人形の変遷.” Kyugetsu, www.kyugetsu.com/en/concept/dolls-histry-and-tradition/itinerancy. Accessed 10 Sept. 2024.

弥栄女. “雛祭り起原考.” ひな祭り文化普及協会, Jan. 2011,

http://hina-matsuri.jp/lern_kigenko05.html.

Ms. Sephie Lean Yu Wen

国際基督教大学への奨学生

(September 2023- July 2024)

“JCCIの皆様、こんにちは。2023年にICUへ留学したセフィーです。日本に過ごした10ヶ月間はいろんな方と出会って、いろんなことできて、良かったと思います。日本に行く前に、少しひらがなとカタカナを勉強して、文を作ることは全然できなかったけど、今は前よりできて、自分が成長したことを感じました。この貴重な機会をいただいて、ありがとうございます。”

私がシンガポールにいる間はボランティア活動をよくしているので、日本のボランティア活動を体験したかったです。ICUのサービ斯拉ーニングの授業を通して、三鷹市にある「フリースペース・コスモ」でサービ斯拉ーニングの活動していました。コスモでボランティアしていた間は、教育とは何か、学ぶとはどういうことかを考えるようになり、今回のレポートのテーマを決めました。

このレポートでは、コスモのスタッフ2名とメンバー9名に、日本の教育について、不登校児童の視点から意見を聞きました。このレポートを読んだ後、JCCIの皆様が考えたことがあれば、ぜひ周りの人と話してみてください。新しい考えが出てくるかもしれません。”

「不登校児の心の声」

はじめに

「フリースクール」という言葉を初めて聞いた時、おそらく低所得家庭の子どもたちが無料で教育を受けられる学校なのだろうと思いました。しかし、コスモのスタッフに聞いた後、フリースクールは無償化教育ではなく、学校に行かない子どもたちが自分自身の「学び」を作れる場所でした。子どもが不登校になった要因は主にいじめ、厳しい学校環境、進路への不安、過度の受験競争など、学校に行きたくなくなりました。

文部科学省によって、「フリースクール」とは、一般に、不登校の子どもに対し、学習活動、教育相談、体験活動などの活動を行っている民間の施設を言います。その規模や活動内容は多種多様であり、民間

の自主性・主体性の下に設置・運営されています。文部科学省は2022年に児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査した結果は小・中学校の不登校児童生徒数は299,048人だった¹。不登校児童数は10年連続増加していて、小学生は10年前の約5倍、中学生は2倍増加しています。

コスモにいた頃は、学習センターの3階でメンバーとよくゲームをしたり、お菓子を作ったりして遊んでいました。時にはメンバーと買い物に行ったり、風揚げをしたり、お花見をしたり、とても楽しい時間でした。ただ、メンバーが不登校であることをどう考えているのか、同級生と進路の違いに悩んでいるのかなどは把握できていなかったです。

そこで、彼らの考え方をよりよく理解するために、教育について話し合うのがいいのではないかと思います。そして、このアイデアをコスモのスタッフに提案してみました。スタッフは、子どもたちからもっと話を聞きたいと言いました。その結果、私はメンバーと日本の教育制度話し合う企画を立案し、実施しました。

コスモのスタッフとメンバーの話し合い

ここが学習センターの3階です。普段はコスモのみなと一緒に過ごす共有スペースです。コスモの子どもたちは、スタッフと同じように団体に貢献できるよう、メンバーと呼ばれています。私がボランティアしていた間、スタッフ4人と小中学生のメンバー15人ほどと交流しました。



コスモのみんなと話し合う当日

学校に行かない子どもたちは教育をどう見ているか

まず、日本の教育について思いつく言葉やイメージを思い浮かべてもらうことからメンバーとのディスカッションを始めてみました。驚いたことに、最初の5分間は何を書けばいいのかわからず、何も書けなかった人が多かったです。当初、私はこの活動は彼らにとってそれほど難しいものではないと思っていました。しかしスタッフの説明によると、彼らの

中には幼稚園以来正式な学校に通っておらず、正式な学校について知らなかったり、同級生が学校でどんな経験をしてきたかを知らなかったりするからだといいます。このディスカッションを通して、彼らはまた、自分の学校での経験がどのようなものかを知らない生徒もいるため、学校での経験について話すときはより慎重になるべきだということを学びました。

図-1、図-2、図-3を見ると、言葉やイメージの大小はその意味によって判断できることを伝え、彼らが教育をどのように捉えているかを学びました。共通して出てきた言葉は「先生」と「校則」でした。ほとんどのメンバーが「先生の言うことに従うのは難しい」「学校には自由がない」という意見で一致しました。教師が怖いというメンバーもいれば、教師が苦しそうだというメンバーもいました。ディスカッ

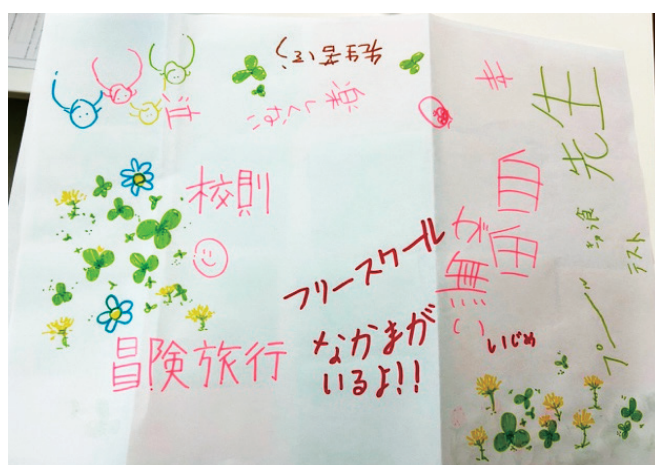


図-1 日本教育に関連する言葉やイメージのワードクラウド

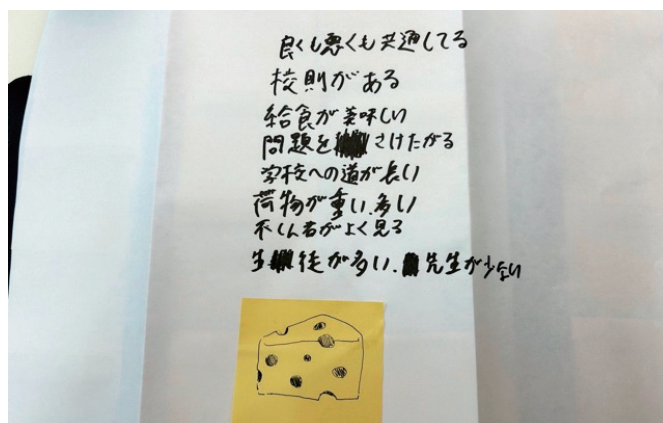


図-2 日本教育に関連する言葉やイメージのワードクラウド

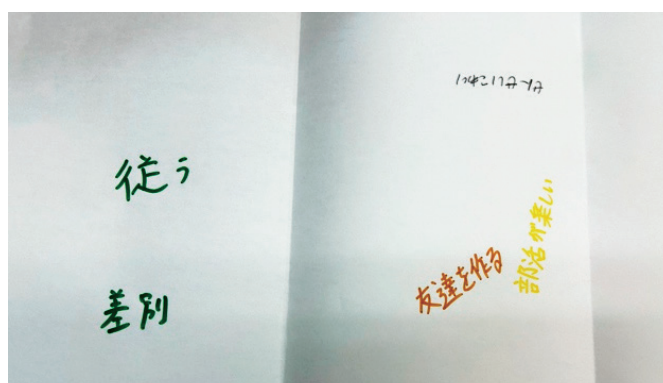


図-3 日本教育に関連する言葉やイメージのワードクラウド

小学校の教科

日本	Singapore	America	Denmark	Finland
国語 社会 算数 理科 生活 音楽 図画工作 家庭 体育 外国語活動（英語）	English Language Mother Tongue Language (MTL) Mathematics Science Art Music Physical Education Social Studies Character and Citizenship Education	English Language Arts (ELA) Math Science Social Studies "Specials subjects" - physical education, art, music, computers, and some form of character education	Danish English History Social studies Mathematics Natural sciences/technology Compulsory subjects: Road safety Health and sexual education and family studies Educational, vocational and labour market orientation *義務教育：小学と中学 は同じ学校に通う (level 1-9)	Mother tongue and literature (Finnish or Swedish) The other national language (Swedish or Finnish) Foreign languages Environmental studies Health education Religion or ethics History Social studies mathematics Physics Chemistry Biology Geography Physical education Music Visual arts Craft Home economics *Focus on media literacy

図-4 日本と他の国の小学校の教科の違い

ションから、日本の正規教育の問題点として、いじめ、ルールを守れない生徒に対する差別、権威的な環境、学校の教師不足などが挙げられることが分かりました。しかし、「仲間がいる」「友だちを作る」「部活が楽しい」「給食がおいしい」という意見もあり、励みになりました。

日本の教育を考える上で参考になるように、教育水準の高さで知られるフィンランドとシンガポールの教育制度について話しました。デンマークやフィンランドでは、大学での高等教育が無料で受けられると聞き、メンバーは驚きました。また、シンガポールでは試験が1～2週間にわたって行われ、学生は1日に1～2科目を受けるため、複数の科目を数日にわたって受ける日本のシステムに比べて、学生が1つの科目に集中しやすいことも知らされました。シンガポールとは逆に、1日に複数の科目を受験するため、学生たちの試験時間が短くなるのが一般的であることも興味深かったです。

学校に行かない子どもの望み

最後に、日本の教育制度にどのような変化を望むか、またどのように教育制度を継続してほしいかについて、スタッフとメンバーに考えてもらいました。メンバーからは、学校の先生の負担、校則の柔軟化、学校に行きたくない生徒への代替手段の提供などについての意見が示されました。また、フィンランドのように教育を無償化してはどうかという意見もありました。図-5と図-6を見ると、メンバーたちは、自分たちが尊重され、自分たちで決定する自由が与えられる環境を望んでいます。

印象的だったのは、政治や人権について学びたいという意見が多かったことでした。政治や人権が自分たちにどのような影響を与え、社会でどのような役割を果たしているのかを理解するために学びたいというのでした。

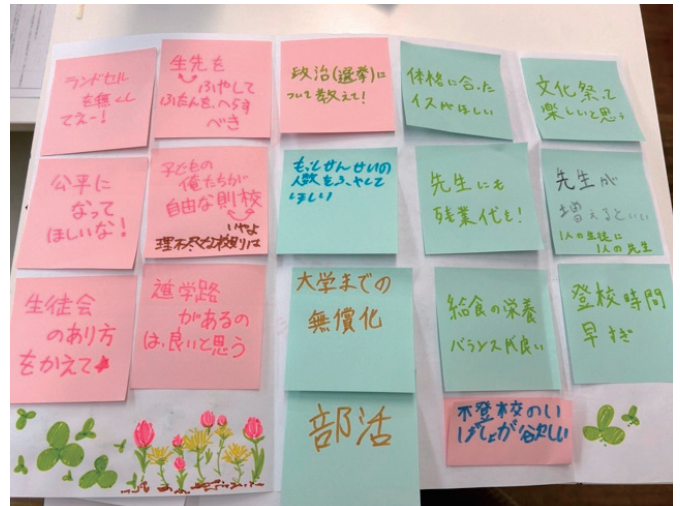


図-5 日本教育制度はどのような変化が欲しいか何が続けるといいか・学びたいこと

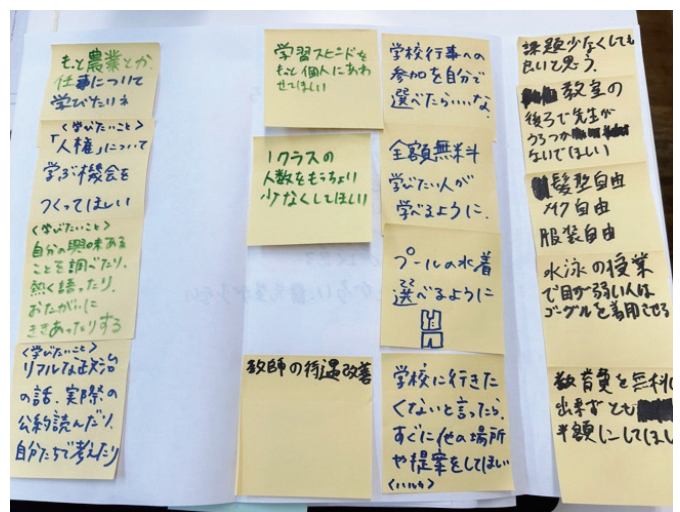


図-6 日本教育制度はどのような変化が欲しいか何が続けるといいか・学びたいこと

おわりに

今回の話し合う企画を考えたとき、メンバーにとって興味深いテーマではないかもしれない、説明が難しいかもしれないと少し心配したが、結果として、メンバーやスタッフとともに教育について真剣に考え、意見を交換し、彼らをより深く知ることができました。彼らは自分たちを取り巻く環境をよく理解し、自分たちが貢献できることは何かを深く考えています。

近年、日本文部科学省は、不登校の子どもへの支援に注目する取り組みを強めています。個人的な問題や構造的な問題を抱えている子どもたちであっても、フリースクールがアイデンティティや帰属意識を見出せる場所を提供していることを目の当たりにしました。これは、こうしたメンバーのレジリエンスを育み、自分たちで学習の機会を作るよう促すのに役に立ちます。シンガポールでは不登校に関する世間の関心はあまり高くないが、実際には中退の危険性がある生徒や中退した生徒がいます。日本と同様、こうした若者を支援するためにスクールカウ

セラーや社会福祉団体があります。学校から中退した理由は家族の問題や、学校の問題や、不安などの精神的な問題です²。現在シンガポールにはフリースクールがないとはいえ、子どもや若者が健全に成長するためには、親、教師、教育システム、社会全体がこうした若者のニーズに目を向けることが重要なかもしれません。

最後に、私とこの話し合いを行う機会を与えてくれたコスモのスタッフとメンバーに感謝します。



コスモのスタッフとメンバーたちの写真

【参考文献】

文部科学省令（2023）「令和4年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要」https://www.mext.go.jp/content/20231004-mxt_jidou01-100002753_2.pdf

Mohamed Ayyub, B. J., & Tan, N. W. L. (2018, July 15). Long-Term School Absenteeism - Issues and Implications. The Karyawan. <https://karyawan.sg/long-term-school-absenteeism-issues-and-implications/>